

# 幼児教育に於ける言葉と音楽 そしてコダーイシステムについて

笹嶋 眞 夫

Il Linguaggio e La Musica per La Educazione Infantile e  
per Sistema di Codály Zoltán

Masao SASAJIMA

弦楽器やピアノ曲を、譜面に書かれてある通りに、正しく演奏されていたとしても、そこに歌心が伴わなければ音楽にはならない。機械的に演奏されては、そこに心が入り込む余地は全くない。同じ曲でも指揮者が変われば音楽も変わる。四拍子の曲であるのなら、予備の拍から、頭の一拍、二拍、三拍とそれぞれに指揮棒が下に下りると同時に加速されて跳ねる。四拍目で上方に大きく手は持ち上げられるので当然減速する。それは、自然な動きから生じる緩急が望ましい。限られた時間の中での微妙な感覚表現の差が、聞き手によって受け入れられたり、拒否反応が出たりもする。歌心のある音楽は言葉同様に、対人間の大事なコミュニケーションの手段として大きく作用する。発信されたメッセージをどのように自分の世界に取り入れていくか。また、逆にどのように発信するか。次代を担う若者たちの人生を、より豊かにするためには、幼児期から計算された音楽教育が為されなければならない。日本では滝廉太郎、山田耕筰、團伊久磨氏等の作曲家が、北原白秋、サトウハチロー、まどみちお氏等の詩を受けて、童謡、唱歌がたくさん産み出されたが、現在の幼児音楽教育では、それらの曲を系統立てて活かされていない。ピアノの音に頼らず、正しい発声法を学び、豊かな声作りをし、現場で通用する指導法を学ぶべきである。本研究では、それらを踏まえて、ハンガリーのゾルタン・コダーイの残した音楽教育論を取り上げ、持論を交えて幼児教育における音楽教育論について述べる。なお、本稿で用いた文献はすべて原著であり、本文中の日本語訳は笹嶋による。

はじめに

今、凶悪犯罪が低年齢化している。その端は、幼児期にあるのではないか。保育所、幼稚園、小学校、その他、子供たちを囲んでいる社会が、時代を担う子供たちへの配慮を欠いている。地域ぐるみで培ってきた教育は個人主義となる。自分さえ良ければの勝手社会である。

何か問題が起きた時騒がれるものの、それはほんの一時で、忘れ去られ、同じような問題が生じた時、何故あの時に手を打たなかったのかと一部の人間だけが責任を取らされる。

自分以外の人々への思いやり、優しさを学ぶ時期は、幼児期である。さらに、胎児期にまでさかのぼる。安定した妊娠期間、胎児への言葉掛けと子守歌、そして乳児期、幼児期での積極的な言葉掛けと歌唱、それらが思いやり、優しさを育むのである。その時に忘れてはならないことは、言葉と歌唱の持つ、リズム、抑揚である。発声者の体全体から意識された豊かな言葉掛けと歌唱は子供の心身の発達に大いに寄与する。

ハンガリーのコダーイ音楽教育システムの一つに、幼稚園での一日は歌で始まり歌で終わるというのがある。教師の言葉（歌唱）は、その言葉の持つニュアンスを基とした抑揚、リズムが活かされている。初め、子供は教師の言葉掛けに対して、殆ど鸚鵡返しであるが、子供からの問唱に教師が応唱で応えていくうちに、子供は対話を理解するようになる。そして言葉の意味を知り、対話の楽しさを知るようになる。その教師と子どもの応唱の過程で、相手への働きかけによって自分の位置付けを理解し、思いやりが生まれる。

日本の多くの幼児教育に携わる人々は、言葉と歌唱とを別のものとして分けてしまっているのではないか。言葉掛けは歌唱同様に発声されなければならないし、歌唱は会話と同様に自然に繋がりを持つようになるべきである。長年、教育実習に参加する学生の現場での様子を見て、気になるのは、殆ど口を開けず横広がり発声をしていることである。言葉を発しているだけで、子供への気遣いが感じられないのである。現職でプロフェッショナルと思った教師は、数人を数えるのみである。口先だけの発声では喉を痛めるだけで、言葉の持つ意味も正しくは伝わらない。空回りするだけである。単に子供が好きだという気持ちだけでは教師は勤まらない。子供たちの見本となるべく、表情・感性豊かに正しく発音、抑揚をつけられるよう教示したい。

## 1. コダーイ音楽教育システムに学ぶ

20世紀初頭、ハンガリーの二人の天才、コダーイとバルトークは、音楽の教養として西欧的でしかなかった知識階級を、民族の歌を愛した民衆に近づけ、民族意識を高めて、さらに高い音楽的教養を身につけさせるべく、ライフワークとして取り組んだ。二人は民謡を採集、それを学問的に整理、分類し、作曲家としてもそれらを取り入れ、近代的な芸術音楽の表現方法を結びつけた。コダーイはさらに若者たちの音楽的教養を高めるために、子供の時にしっかりした正しい教育を満たすべきであると強調した。そして誕生から就学までの、童謡を基にした教育システムを作り上げた。童謡は（子守歌も含む）、言葉の抑揚と音楽が見事に一体化しているからである。この伝承音楽は、話しことばを形成し、美しい発音に変化させ、語彙を増やす助けとなる。コダーイは次のように言う。

民族の高貴な旋律、メロディが広く世の中に浸透すれば、一般の音楽的趣味が向上する。我々の国語はこれらの旋律に生き生きと生き続けている。長い歴史の中で歌われてきたメロディと言葉、それは互いに相調和するものでなければならない。そして一人でも多くの仲間と歌い継ぐことで、崩れかけてきた我々民族の言葉も、必ずや新しく生きる力を得る筈である。(参考文献2)

この言葉はどの民族に対しても言えることで、特に、現在の日本は早急に、幼児期から、この音楽教育システムを取り入れるべきであると考えます。

### 1-1. 5音階 (4・7抜き音階)

現在、興味本意で作られた溢れんばかりの童謡は、ただ歌わせているだけでは大変な問題となる。何故なら、DOからDOまでの音階はMI・FAとSI・DOの半音が含まれており、その全音階で作られた曲を歌わせられた未発達の子供たちの多くは、正しい音程で歌えなくなるからである。成長途上にある声帯に適した歌は、半音無しの、(5音階)音の種類が少ないメロディである。例えば「チューリップ」の歌は、以下のように5音階で出来ている。

チューリップ

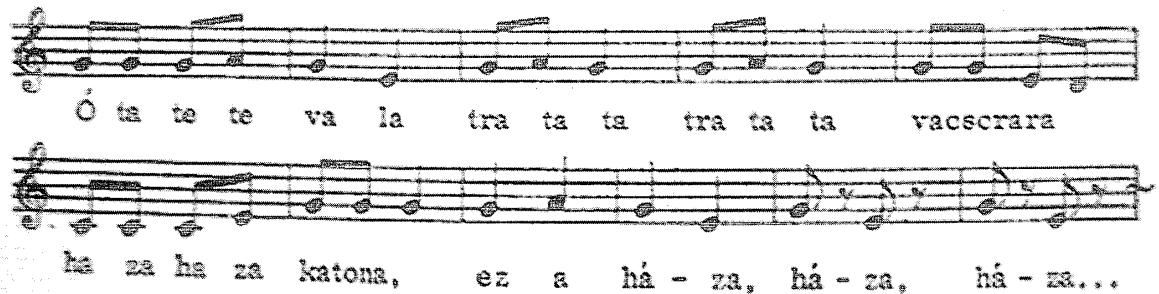
近藤高子 作詞  
井上武士 作曲

しかし、「むすんでひらいて」の曲は半音を含み、未発達な子供の耳から歌わせた場合、半音の部分で曖昧になる。しかし、初めにペントニックの5つの大事なDO・RE・MI・SOL・LAをしっかりと捉えた子供は、適切な時期になると、上からも、下からもMI・FAとSI・DOを音階の中に当てはめることが出来るようになる。その過程で、faMI、siDO等で装飾音として使用した全音階への移行がスムーズに行えるようになるのである。

3才半の G. B. (女) は、わらべうた「Zsipp, Zsupp」のふしをそのまま、次のように作りかえました。



Sz. Cs. は3才の男の子ですが、知っているわらべうたの一部を使って、別の長いうたを作りました。



コダーイ・システムとは何か (ハンガリー音楽教育の理論と実践)

全音楽譜出版社 25 ページより抜粋引用

### 1-2. 歌うことの重要性

コダーイは、民族伝承の童歌と同様に、それを元とした歌を作曲する必要性を感じた。子供が言語習得にかかる時期は、言葉の持つ抑揚、アクセントが非常に大事である。言葉の持つ音楽的価値は、全ての国の継承、伝承音楽と同様に、大変個性的である。言葉は歌い、歌は話していると解釈して良いのである。子供の言語、音楽に欠かしてはならないのは、言葉の抑揚（音楽）と歌のリズムを同時に掴み、模倣習得させるということである。子供の全ての能力をフルに発揮させるために、美しい言語、価値ある文学、音楽に対して向ける興味の三分野に渡って、きちんと方向づける必要がある。

その第一歩は歌うことから始まる。日本ではピアノは弾けるが歌えない音楽家が多い。日本での音楽教育はピアノを習わせることから始まり、いかに音を叩くかということ、頭と耳で音を捕まえさせる。体全体で音楽を感じさせるより、左の脳（言語脳）に偏り、右の脳（音楽脳）がお座なりにされた教育であった。現在はかなり改善されてきてはいるが、まだまだ音楽を体で感じさせる、同時に歌を歌うことは困難である。初等教育科に学ぶ学生の殆どは、弾き歌いが苦手である。ピアノに集中すると歌が完全に消えてしまう。ピアノはどうあれ、いつでも歌はついて離れないはずである。乳幼児期から歌い掛けがいいかげんにされて

きた結果である。手は動かなくとも、歌は続かなければ意味がない。つまり、全ての音楽教育の基礎は歌うことから始まる。後に楽器を習うにせよ、演奏会での喜びを享受するにしても、歌は重要である。技巧ばかりが前面に出て楽しめない音楽会は、体が歌っていないからである。根本が欠けているのである。コダーイは、歌うことの重要性を次のように主張する。

より深く、より高度な音楽的教養にとって、歌うことこそ、その基礎である。人間の声は、誰もが持っており、全ての人のものなのだ。歌いたいと思えば、私たちの声は誰にとっても、無料の最も美しい楽器となる。この楽器を自由に使いこなせるように、正しく美しく磨くことは、子供のみならず、学生、若人達の義務である。そうしてのみ、音楽の偉大な世界の入り口に到達できるからである。(参考文献2)

また、次のようにも述べる。

文化遺産は人からもらうものではない。先祖、先輩たちから残された文化は、それぞれの世代が、それを通して改めて自分たちのものに、し直すのでなければ、瞬く間に消えてしまう。私たちが実際に音楽をすることを通して働き、自分たちの魂の中に耕し入れたものだけが、私たちの中に生き続ける。音楽の本を読んだり、人の音楽を評したり、音楽について知っていることで音楽の代用はできないのだ。

歌唱を中心とした教育は、集団を伴った教育として絶対に欠かすことの出来ないものである。乳幼児期に始まる、語りかけ・歌い掛けから、民族特有の歌いながら遊ぶ童歌は、何人かのグループの中でこそ可能となる。参加している子供たちそれぞれが、自分の歌を通していくらでも作り出していけるものである。音楽活動は、集団から生まれる遊びの体験から始まる。自分から発信するものと回りの仲間から発信されるものとの作り出される音楽は、自己確立と他人に対しての協調性を養う。遊び心から生まれた音楽性は、遊びの成功を生み、コーラス歌唱へと繋がっていくことになるのである。コダーイは説く。

教育者は、子供の知性の最初の目覚め、思考の最初の発現形態を、フルに活用しなければならない。音楽も保育園から始めるべきであり、本当に正しい音楽を分かる耳を育てるには、少なくともこの時期には正しい方法をもって指導をして行かねばならない。

さらに十年後には、子供の音楽教育はいつから始めたら良いか、の質問に対して、「誕生日9ヶ月前から」と答えている。(参考文献2)

母親の役割は、子供にミルクを与えるだけではない。自分の肉体、魂から分け与えて、子どもの魂をも作り上げるのである。母親がアルコール中毒であれば、子供にもそれが受け継がれる。母親がもし、音楽的アルコール中毒であれば、言わずもがなである。親の趣味は子供を見ただけで分かる。だから、保育園、幼稚園の音楽の改善に努力することは、小さな教育上の問題だけではない。国全体の問題なのだ。一刻も早く、正しい軌道に乗せることが必要であろう。

実際にハンガリーのケチケメートにあるコダーイ音楽学校を訪問したおり、前述したコダーイの音楽システムの効果について加え、この教育システムを受けた生徒と、他の学校を出た生徒の生活の追跡調査を行った結果を伺った。それによると、色々な職業に関わらず、コダーイシステムを受けた者のほうが精神的に安定した生活を送っており、社会における貢献度も高かったという結果が出た。コダーイの、「真の音楽的教養は、全ての人に到達可能であり、与えられなければならない。音楽文化への道とは、学校の授業を通して、音楽の読み書きを一般化し、古今東西の音楽傑作を万人の宝とし、貧富、階級の差を問わず、全ての人々にとって共通の財産にしなければならない。」という文言は、音楽教育の重要性を説いたものである。

## 2. 音楽教育はどうあればよいか

コダーイは、学校における音楽のレベルを上げる必要性を説いた。ペスタロッチ (1746～1827) は、「社会全体は歌うこと、音楽の道を示さねばならない」と説いた。これは、音楽教育の歴史の中では初めて述べられた言葉である。しかし興味深いことだが、ペスタロッチは音楽は苦手だった。次に、コダーイの論文「子供のコーラス」の中に書かれた、彼の重要な提言を示す。

1. かつての古代ギリシャ同様に、教育の中で音楽が中心的役割を持たす。
2. 音楽的文盲は音楽文化の発展を妨げる。それでは真面目な音楽会やオペラの観客が少ないのは当たり前のことである。
3. 小学校教育養成の音楽の授業課程は改善されなければならない。
4. 幼児には、絶対に趣味の悪い音楽を聴かせてはいけない。音楽的に病んでしまった大人は不治の病にかかったのと同然である。
5. 音楽の授業は学校で必修科目とするべきである。
6. 毎日、身体を動かしながら歌うことは、子供の心身ともに発達させることになる。
7. 合唱させることは子供の教育に不可欠のものである。大勢で共に良いハーモニーを生み出す努力から得る喜びは、気高い性格、規律正しい人間を作る。この合唱の果たす役割は計り知れない価値がある。
8. 6歳から16歳までの音楽経験が重要である。成長の著しいこの時期が音楽を盛んに吸収、才能が目覚ましく発揮される。
9. 子供には最高の芸術性を持った作品を与えなければならない。子供は最高のものを与えるに適している。傑作を通してのみ傑作に近づくことが出来る。
10. まず自国の民謡を子供の母体としなければならない。それを身につけてから初めて外国の音楽教材を与えるべきである。

11. 音楽に近づく最も良い手段は、誰もが持っている自分の楽器である、喉を使うことにある。歌うことは誰でも出来るからである。
12. 外国の優れた合唱曲を歌うべきであるが、自国の合唱曲は、自国の民謡を体得し、それに基づいた曲を書く作曲家によって作曲されなければならない。
13. 教育の構造を組織化するには、まず国がやるべきことのひとつである。それに掛かる費用は、将来、音楽会やオペラに出かける聴衆が多くなることで採算が合う。

### 3. 音楽文化の基礎は学校にある

1941年にコダーイは次のように述べている。

1. 音楽は全ての人々に与えられるべきものである。本当の音楽教育は、音楽を解り楽しめるものでなくてはならない。
2. 音楽は小学高学年で教え始めては時既に遅い。出来るだけ早く、保育園から教えるべきである。
3. これは、楽器を義務的に習わせるのではなく、音楽文化の源、歌うということから始めるべきである。

二番目に書かれた保育園についての論文は、上掲の論文に続いて、同年の1941年に「保育園の音楽」という題で出版された。次に、コダーイ・メソードについて書かれた文章を、さらに引用する。

1. 音楽教育はその能力を育てるだけではなく、聴く能力、集中する能力、反射能力、情緒を養い、身体発達にも良い影響を与え、子供たちの多くの能力を育む。
2. 国語を習うと同時に自国の音楽を学ばせるべきである。勝手に歌わせるのではなく、それぞれの子供に合った音域とその子供が理解出来る歌詞を兼ね備えていなければならない。
3. 子供が悪い音楽に染まらないように、保育園時より予防しなければならない。大人になってからでは手遅れである。
4. 歌とその動きは、誰もが知っている童歌遊びを通じて融合されるべきである。

この時期、さらに大きな重要な原則が打ち立てられた。それは「子供は楽譜が読めるようになってからでなくては、楽器を始めてはならない。」という制度である。この制度は1945年から実施されるようになったが、生徒たちはまず音楽の基礎を学ぶことから始め、歌うことによって聴力を養い、リズム感を育てる予備の一年を過ごしてから、初めて楽器に触れることが出来るようにするとしたのである。

1946年に、コダーイは、音楽の専門教育について述べている。

1. 良い音楽家になるためには、いつでも耳が指に先んじ、その動きをリードしなければならない

ならない。

2. 楽器によって音を確かめるのではなく、楽器から音を掴める能力は、演奏する楽曲の理解をさらに確かなものとする。

#### 4. コダーイシステムの効用

レベルの高い音楽の基礎教育を受けた保育園（幼稚園）から、一般の小学校に入った子供は、クラスのリーダーになったり、他の子供の学習を手伝ったりする。これらのリーダーの行動が、クラスの遅れている子を励ますようなこともよくある。教師はこのリーダー的存在をクラス運営に役立たせることが出来る。小学校に入ってきた耳の劣る子も、一、二ヶ月すると、耳の良い子と歌っているうちに、どんどん改善されていくという事実があり、耳は訓練次第で良くも悪くにもなるという証拠でもある。よい耳を持つ子供が多い中で、一緒に歌っていくことによって聴感を養い発達させることが可能なのである。なぜか歌詞をつけると音痴になる子供も、階名で歌わせると正しく歌えるということがある。幼児の時より、移動ド唱法で旋律の音程関係を耳から正しく系統立てて教えると、その耳の問題は自然に解消できるのである。

ハンガリーには、ブダペストとケチケメート（コダーイが生まれたところ）に独立した音楽学校がある。1年から8年までを通して音楽を主とするコースと、普通のコースとが並列されている。ハンガリー全体でも音楽小学校を付属させる118の小学校があり、音楽を主とするコースと普通科コースとがあって、それぞれの過程における学習能力の比較が可能である。二つのコースを比較してみると、音楽教育が子供たちの情緒、知性の発達にいかに関与しているかがはっきりと表れている。音楽をする子供たちのほうが生き生きとしており、物事に素早く反応し、数学、国語、図画工作、体育においても、成績が良いことが顕著に表れている。

毎日の歌唱の時間によって、一般教科からの気分転換が図れ、音楽能力も、かつ、論理立てて考える力もつく。合唱で要求される協調性も養われ、社会性も育まれる。また、音楽教育は、個人個人の社会に対する責任感を育てるのに重要な役割を持つ。一人でも間違えると、それまでの努力は全て無駄になるという事実が、責任感や集中力をもたらし、自らを律する態度を養う。前にも述べたように、音楽教育の効果は科学的分析により、生理学、心理学の分野でも十分に説明のつくことが立証されている。

#### 5. 教師の知るべきことは

次に、音楽教育を進めるに当たって教師が心得ておかななくてはならないことについて述べる。



### 1. 体全体を感じて言葉掛けを、歌い掛けをしているか。

歌い手に顕著に見られるのは、声帯に繋がる顎のみ、もしくは口のみ、上半身のみ、で歌っている姿である。子供も大人も全ての人の歌い方に、そのような上っ調子な歌唱、固い歌い方（緊張等）を聞き分けることが出来る。歌唱の基礎力があり、かつ己を知った素直な歌い掛けは、感動を呼ぶ。専門家は、頭の髪の毛の一本一本から、足の爪先、勿論、内臓までを全部リラックスさせ、腹筋（支え）感じてから声出しにかかる。無駄な力を排除させ、視野を最大限に広げ、歌詞、言葉の（状況に応じての）意味を押しつけではなく十分に伝えられて初めてプロフェッショナルといえる。

### 2. 声の源、声帯を楽に泳がせているか。

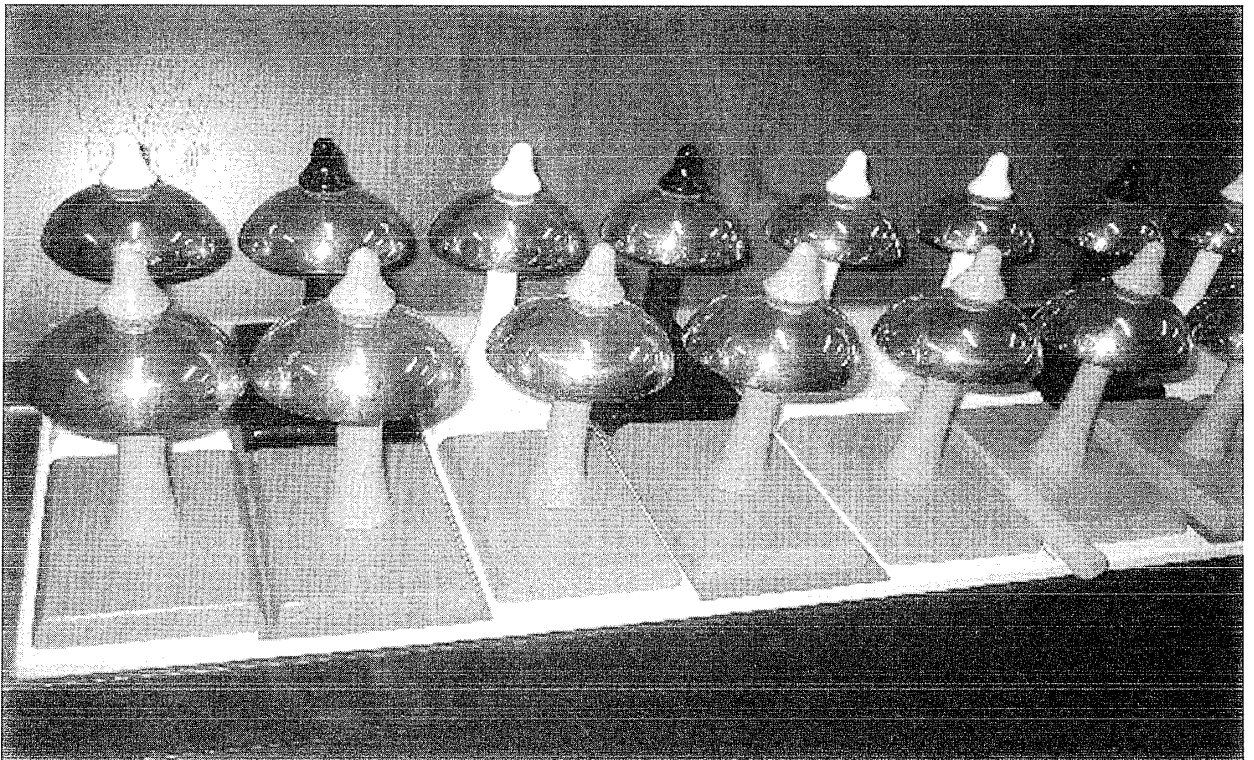
声帯は気管の入り口にある。元はと言えば、埃やごみなど悪いものを吸い込まないためにガードする筋肉であった。人間は四足歩行から二足歩行に移り、地面の砂ぼこりを近く吸わなくなり退化したのである。その結果、吐き出す空気の多少や伸縮によって豊かな音声を生むこととなった。自然に、より柔軟に活動させる技術を掴めたか否かが、プロとアマとに一線を引くことになるのである。その理論は簡単である。自分の持てる声帯を自然に無理なく泳がせることである。声帯に繋がる仮声帯、それに繋がる全ての筋肉組織を弛緩させることである。顔全体に渡る表情筋、首全体、肩から胸筋、背筋、腹筋、全ての筋肉組織を解放することが出来て初めて、専門家としての仲間入りが出来るのである。これらのことは、声楽家として通用させるための基礎である。借り物ではない自分自身の声を出させるために、無駄な力を排除するのである。

### 3. 即座に反応させる。

知り合いの幼稚園で歌唱指導をしたことがある。一通り歌って曲のイメージを掴んで欲しいと思ったところ、反応の良い子は、歌うや直ぐに人の口をしっかりと見ながら、ほぼ半拍遅れで歌っていた。特に年長児に多く、こちらの揺れる体の動きまで真似をする。歌うことは体の動きも伴うものであるから、必然、運動能力の優れている子供は音楽も得意でなくてはならない筈である。幼児期より音楽に親しませ、そのリズムやテンポに合わせて体を揺らしたりすることは非常に大切である。体全体の動きをスムーズにさせると共に、聴覚も発達させることが出来る。

また、ピアノなどで音を聞き分け、即座に同じ音を反芻させる、声を出させることも大切である。多種類の楽器を使い、こちらで示した同じ高さの音を見つけさせるのもよい。マリア・モンテッソーリの音楽教材に、きのこ型の鐘が木琴や鉄琴同様、低い音は笠の部分が広く大きく、音が高くなるにつれて小さくなるように、鐘の大きさを変えているものが

ある。ピアノの鍵盤と同じく、鐘の頭の部分が白と黒に分かれており、順番に叩いていけば半音階に、白鍵のみを叩いていけば長音階、オクターブを鳴らすことが出来る。もう一種類は全部同じ大きさで揃えてあるため、叩いて見るまでその音が分からない。叩きながら音階を揃えていくのである。全て純音に揃えてあり、巷で売られている幼児用玩具のいい加減な調律とは明らかに違う。幼児用玩具は、始まりの音は自由で良いが、それに続く音の繋がりが曖昧な作りのものが多く、改善されなければならない。



絶対音感の是非を問うものとは別である。正しい音感、音の繋がりがつかめ、歌唱時に教師の「元気に歌いましょう！」の問いかけさえなければ、確実に無理のない声が期待出来る。子供の声帯はデリケートで、怒鳴らせてばかりいると、一生擦れ声に、また、耳の働きも悪くし、いわゆる音痴にしてしまう危険性がある。歌う楽しさも共有出来なくさせてしまう。聞くということ、体全体で音楽を感じさせるという最初の一步は幼児期にあるのである。

実習園にお邪魔する度に、適切な指導をしている園の少ないことに心を痛めている。リズムの専門家や、プロの指導員を導入している園は恵まれているが、本来はそれぞれのクラスの担任がしっかりした音楽の指導力を身につけていなければならないのである。音楽はそれらの子供たちの一生を左右する。先に述べたように、ハンガリーのコダーイ音楽システムを実践している学校を出た者と一般学校を出た者の人生を辿った際、より良い生活を送っている（人生を楽しむ）のは明らかに前者の方であったことを考えると、幼児期における音楽教育の重要性を改めて認識しないわけにはいかない。

## 終わりに

冒頭に述べたように、幼児期の音楽教育は大変重要で、お座なりに出来ない。実際に学生の教育実習に立ち会い、実習観察で得た事実からも、教育に携わるものとしてしっかりした実践技術を学ばなければならないと強く感じた。

三年前、国際音楽交流として、ハンガリーのブダペストにある、リスト音楽院ホールで演奏会を開いた。その折、地元の合唱団より、系統立てられたゾルタン・コダーイの作曲集をプレゼントされた。さらに、リストの記念館、ベラ・バルトークの記念館などを回った後、ケチケメートのコダーイ音楽学校を訪問し、授業参観並びに、校長よりコダーイシステムについて講習を受けることが出来た。

音楽が与える影響は計り知れない。豊かな人間形成に欠かせない。心豊かに育った女性が妊娠し、胎児への優しい語りかけや歌いかけをし、そして出産する。誕生後は、優しく豊かな環境に取り囲まれ、お互いを思い遣る人間関係の中で育つことができれば、三面記事は楽しい心温まる記事で埋まることだろう。

この問題提起するにあたり、改めて、コダーイについての文書を読み直して見て、音楽教育の大事さをさらに実感した。以前、夷隅郡での中学校連合合唱祭の講師として参加した際、中学生たちの生き生きとしたハーモニーを堪能したことがあった。帰り際に、当番校の校長の、「ゆとり教育で足りなくなった時間を補うために、音楽の時間は無駄だからカットされてしまいます。音楽が一番大事な教科と思っているのですが……」と言った言葉と苦渋に満ちた顔が思い出される。その後の音楽教育は、どうなったのであろうか。

[参考文献]

Ungheria

1. Frigyes Sándor : *enei nevelés Magyarországon, Budapest, 1964.*
2. Kodály Zoltán : *Visszatekintés, Budapest, 1964.*
3. Adám, Jenő : *Módszeres énektanítás a relative szolmizáció alapján, Budapest, 1944.*
4. Irsai, J.Vera : *Zenei előképző, Jegyztek a szolfézs példatár, 1.kötetéhez, Budapest, 1953.*
5. Szönyi, Erzsébet : *A zenei írás-olvasás módszertana 1 ~ 3, Budapest, 1954.*
6. Perényi, László : *Az énektanítás pedagógiája, Budapest, 1964.*
7. S.Molnár, Edit-Friss, Gábor : *Az énektanulás módszerének hatása a tanulók teljesítményére pedagógiai Szemle, 1962.*
8. Kokas, Klára-Eiben, Ottó: *Ritmikus mozgások és énekes játékok hatása óvodás gyermekek testi és szellemi fejlődésére pedagógiai Szemle, 1964.*
9. Kokas, Klára : *Érdeklődés alakulása ének-zenei tevékenység folyamatában pszichológiai Szemle No.2, 1967.*
10. A Grammer of vocal Music  
声乐入門より
11. ソルフェージュ教授法、羽仁協子訳・全音楽譜出版社
12. Musical Education in Hungary
13. ハンガリーの音楽教育、羽仁協子編訳・音楽の友社
14. 子供のための音楽教育、羽仁協子・評論社
15. ハンガリー子供の遊びと音楽、羽仁協子・明治図書
16. ラースロ・エウセ著・コダーイの生涯と作品、谷本一之訳・全音楽譜出版社
17. サポールメベンツェ著・ハンガリー音楽小史、谷本一之訳・音楽の友社
18. コダーイ・システムとは何か  
フォライ・カタリン、セーニ・エルジェーベト共著
19. 羽仁協子・谷本一之・中川弘一郎 共訳・全音楽譜出版社